

江戸期幣制を考える

——世界史的視野のもとに——

A study of the monetary system in Yedo period

三 上 隆 三
Mikami, Ryuzou

ABSTRACT

The monetary system in Yedo period started by “Sanka-Seido” which was founded on the fact trio of current moneys ——gold coin, silver coin and copper coin.

In the Meiwa 9th year —the year 1772A.D., the new type of silver coin “Meiwa-nanryo 2 shuban” was issued. This fact came in effect to establish the gold standard prior to other countries—the world. The gold standard in especialy by Great Britain (=most forward nation in that times) was established in the year 1816A.D..

I 江戸期幣制の背景

「ワンス・アポン・ナ・タイム——昔むかし、あるところに」のせりふで始まるおなじみのお伽噺ではないのだが、その昔にあって一世を風靡さえしたもののでも現在ではまったく忘却の淵にのみこまれてしまっているものは多々ある。もとより日本貨幣史上のそれとても例外たりえないことは云わずものかなである。たとえば銀貨のはじまりは——慶長丁銀（ケイチョウ・チョウギン）でなくて和同開珎（ホウ・チン）・和銅元=708年（異説もある）がこれにあたる——とか、あるいは金貨のはじまりは——慶長小判ではなくて開基勝宝（天平宝字4=760年）これである——などもそのひとつであろう。

話題はかわるが、江戸時代というに関ヶ原の戦い（慶長5=1600年）で実質は豊臣大名同志であるにも拘わらず、たまたま徳川家康にしたがって東軍（トウグン）という名の豊臣軍団が、同じく西軍とよばれた豊臣軍団を破って勝利をものし、その結果として徳川家康は豊臣政権のもとでは one of them だった地位から事実上の ruler of Japan, いわゆる天下人（テンカビト）に登りつめるのに成功した。これに対して朝廷の方から慶長8=1603年に征夷大將軍に任命したため、幕府が村落に毛のはえたような地点に江戸という都市の建設とともに江戸幕府をひらき、ここに江戸時代がはじまるわけである。

因みにその関ヶ原の役（エキ）に参戦すべく家康の三男たる秀忠に従う自己の徳川軍本隊そのものは、信州上田城にあった眞田昌幸・信繁=幸村父子の知略に翻弄されて時間を空費してしまった。したがって関ヶ原の戦闘には参加しえず、当然の事ながら西軍の660万石に達する大名領地を没収したものの、肝腎の徳川軍団とは無関係にそのすべてが東軍になった豊臣軍団に分配せざるをえず、家康にとって不本意な戦争結末だったといわねばならないものだった、忍従専門の家康だったとはいえ。

ただし後には関ヶ原戦の敗軍の將・石田三成の居城の地に徳川軍団隨一の力量をもつ井伊彦根藩をすえて外様（トザマ）大名に睨みをきかせ、また本来的には主君なる豊臣秀頼を攝津・河内・和泉（イズミ）の65万石の一大名に押え込んだ。更には織田信長、というよりは豊臣秀吉の故智にならい、環境にも配慮したと高く評価されて、多くの予想に反して平成19=2007年には見事に世界遺産の認定をうけた石見（イワミ）銀山に、これは徳川のものであるとの通達を関ヶ原戦直後に出して押え、信長とともに天目山で武田勝頼、というよりは名門の武田氏を絶滅させた折、家臣に採用したその遺臣の一人でもある大久保長安——貴金属採掘のエキスパート——を金山（カナヤマ）奉行として同銀山に送りこんで、その地からの大量の銀により幕府の最初の経済的基盤安定をもたらしたのだった。

以上のいささか講談調気味にのべた事件を前提にして、家康は金貨・銀貨・

銅貨の三種の貨幣を流通させた事実から、一般に三貨制度とよばれる貨幣制度を樹立した。そこで話柄を江戸期幣制の特徴について世界史的視野のもとに明らかにしたいのである。そこには実に驚くべき事実が埋れているわけで、節を改めてこのことをのべることにする。

Ⅱ 江戸期幣制の特色

江戸時代の金貨・銀貨・銅貨の三貨幣のうち、前二者は幕府公認の小判座——後に金座と改名——と銀座とで製造した。銅貨はそれよりも相当におくれて寛永年間に銭座（ゼニザ）で製造した。銭座における銅貨の製造は町人による請負いで極端に言えば全国的に散在する、そして規定量を製造すれば解散するという非常設機関だった。ということは小判座＝金座と銀座とは常設機関であった。これらの機関でそれぞれ製造された金貨・銀貨・銅貨の三種のものが同時に通貨として併用・流通しているところから、江戸時代の貨幣制度を単純にとでもいうか全く機械的に三貨制度と称したまでのことにすぎない。その命名にはひとかけらの文化性も見出すことはできないのである。以下において展開する話題は金貨・銀貨、特に前者が中心になるので銅貨はこれを限りとして退場してもらうことにする。

そこでこれから江戸時代の金貨・銀貨の特色について考えたいのであるが、その特徴なるものをより明白に浮びあがらせるために、特にそのころに世界帝国として活躍していたイギリスの同時期の貨幣との対比のもとにこれを展開することにしよう。

このように設定された条件のもとで鮮明に照し出されるものには二つある。純分量の問題と金銀比価の問題これである。早速にこの問題にとりかかるところにしよう。

（1）純分量の問題

ここにいう純分量というのは、例えば金貨を例にとると、金そのものは柔らか

くてそのままでは市場で通貨として動くには不適切である。ためにそのものを固くするために他金属——世界的主流は銅——と合金することでこれを果すのが通常である。したがって今仮りに 20 グラムの銅と合金された 30 グラムの金貨の場合、その金貨にふくまれている 10 グラムの金のことを純分、その分量を純分量というのである。

解説はそれまでとして純分量の問題の結論をまず述べれば、江戸時代の金貨群の純分量は刻の経過とともにこれを大きく減少させたということである。これを具体的に述べるとつぎのようになる。江戸時代の金貨の出発点にある慶長 6=1601 年製造の慶長小判と終着点に位置して明治維新にもつながるものとしての万延元=1860 年製造の万延小判との両者を対比してみると、最初金貨としての慶長小判 1 枚=1 両のふくむ純分量=純金量は 4 匁——正確には 4.0122 匁だが——だったのに、最後の万延小判となると大きさがこれまでのものより二回（マワ）りも三回りも小さくなったので雛小判（ヒナコバン）——語呂があらためか姫小判とも——と一般に呼ばれるような貧相な形態になってしまい、それがふくむ純分量は僅かの 0.5 匁にすぎなかった。つまり慶長小判の純分量の約 1/8、ということはなんと 88 パーセントも減少したということである。

これに対比するイギリスの場合はといえば、同時期=期間のはじまりである 1601 年は女王・エリザベス I 世の時代であって、当時のポンド金貨と 1860 年ころ、ということは明治維新前後のころのソヴリン金貨との含有純金量の対比はわずかの 28 パーセント減にすぎなかった。これによって江戸時代金貨における純分量の減少ぶりがいかに大きかったか、それは異常でさえあると思えるほどである。

極めて大きな純分量の減少したこの理由については後述にまかせたいのだが、ここで若干の説明をとりあえずしておかなくてはならない。というのもその原因が単純とでもいうか常識的な無駄づかい=浪費がすぎたというのならまだしも、ただしこれが決して無かったとはいえないまでも、とにかく納得のゆきかねる理由によるものだからである。

江戸幕府にも良心的な君主・官僚がいて良貨の製造を果したこともある。徳川吉宗が前者の代表であり新井白石が後者のそれであろう。しかし他方ではこれらの人々の努力をセセラ笑うかのように、江戸初期には良質の慶長丁銀（チョウギン）とよばれる銀貨が朝鮮や長崎を通じて間接的に直接に中国へ総製造量の大部分が流出してしまった。もとよりこの理由は朝鮮や中国から文物を輸入したからでもあって、さきに「浪費が決して無かったとはいえない」と条件をつけた所以（ユエン）のものである。

こんどは銀に対する金なのだが、金は江戸後期にいたって天から降ってきたか地から湧いてきたかともいうか、まさしく天災地変同様に発生した不可抗力そのものであった。この理由については是非とも弁明しておかなくてはならない。というのもこれは無駄づかいがすぎたといった性格のものとは全く別物だからである。前口上（マエコウジョウ）はこれくらいにして具体的に論じよう。

江戸末期には世界的な大航海時代の潮流をうけて海外諸国からの開国の圧力が強まった。幕府も遂に国是を 180 度転換して鎖国から開国へと船舵を切り変えざるをえなくなった。しかしこれを実行した当局のものは海外情報にくらく不勉強もあって思わざる落とし穴に遭遇することになってしまった。江戸初期の銀貨に対応するかのように今度の同末期には金貨が問題の中心になった。すなわち日本国内の金銀比価と国際金銀比価の間に、前者の 1：5 と後者の 1：15 という大幅な落差のあることがわかったのである。この両者間の乖離によって人工的ゴールド・ラッシュといわれるほどの大量の金が海外に流出してしまった。海外諸国との条約締結・調印のための日本使節団を乗せる軍艦が、肝腎の全乗組員が一般商人同様に上述の比価落差による収益の恩恵に均霑（キンテン）しようとして行動したので、使節団は予定スケジュールにしたがって出発することができなくなったという事例さえ出たほどである。この金の大流出が純分量の激減の中心的理由である。

(2) 金銀比価の問題

ヨーロッパ諸国は江戸時代日本にとっては一流近代国家とでもいえる国々であるのだが、それにもかかわらず常に金銀比価の問題にだけは、すなわちその公定比価と市場比価との乖離に悩まされていたのに対し、なんと昔々の江戸幕府がこの問題について右往左往したということは聞いたことがない。では一体全体どうして幕府がヨーロッパ諸国なみにこの金銀比価の問題から免がれることができたというのであろうか。そのこれからの解放の理由を考えてみよう。

もとよりヨーロッパ諸国とてその問題解決に努力しており、決して手を拱いていたわけではない。それに対処したものは多々あるが、その代表例としてイギリスの場合のそのひとつを紹介してみよう。

1887年にイギリスでは金銀比価問題を考えるべく「王立金銀価値委員会」なるものが設置され、学識経験者の代表者としてケムブリッジ大学教授・アルフレッド・マーシャルに質問状を送ってその回答を求めた。マーシャルからの回答は金銀合成本位制 (symmetallism) とよばれるものの提唱だった。

マーシャルの提案の主旨を簡単に述べれば次のようになる。金銀両本位制とよばれているものは、金も銀もともに十分に豊かであれば両者を用いることによって、そのそれぞれの価値は安定するはずであるが、そうでない場合には有名なグレシャムの法則が作動して、いずれかの悪貨の方が本位貨幣としての事実上の役割を担当してしまうのである。したがって名目上でこそ両本位制にはなっているのだが、事実上・実際には単本位制が適宜に交替しているにすぎないのだという。換言すれば眞の意味における金銀両本位制というものはなかったというわけである。

このように批判したマーシャルは、ついで眞の意味における両本位制実現のためのおのが積極的理論・見解を展開するわけである。金銀両本位制を実現するためには金と銀とを合金してそれを貨幣の素材にすべしという。ただしこれは頭の中で描く理想であって、金銀の合金をつくることは実際上はむずかしい。したがって現実には金銀は別々にこれまでと同様にそれぞれを延べ棒の形態に

しておいて、新たにポンド貨＝ポンド紙幣を発行する場合、あたかも金と銀とを合金にしたと同じようにその半分は金・半分は銀といった組合せで発行せよと主張するのである。しかしこのマーシャル案に対する世評はといえば、瞠目するようなものではなくて総じていえば変りばえのしないものだとして見送られてしまった。ただし本人のマーシャルはこの考えをその後も十年ほど事あるたびにこれを主張していたとか。

愚考するに、このマーシャルの思考は古代王国のリディアのエレクトロン貨幣とよばれるものにヒント・サジェスションを得たのではなかろうか。ともあれ現在においてエレクトロンといえば電気・電子に関する言葉になってしまっているが、そもそもの発端（ホッタン）はギリシア語における *electron*——そもそもあつかましいかぎりともいおうかギリシア語というからには、当然のことながらこれをギリシア文字で記述すべきはずである。ところがここで告白させてもらえば、おのが無知ぶりを満天下にさらけだして恥しいかぎりであるが、ギリシア文字＝ギリシア語を知らぬ己（オノ）が阿保ぶりをかみしめている——である。

さて当面のエレクトラムなのだが、その第一義はひろく女性によって宝石なみに愛用されている琥珀（コハク）そのものである。金銀の合金の色彩そのものが琥珀のそれだったことから、金銀合金を素材にする貨幣をエレクトロン貨幣とよぶことになったわけである。ついでその第二義は電気である。この琥珀を布などでこすると琥珀そのものに電気が生じて軽小のものを引つけるという不可思議な力・現象の発生することがギリシア時代にはすでに知られていた。この力に対して名前をつけることが科学のはじまりとばかりに中世末期の学者・ギルバートによってエレクトリックと命名され、その名詞が後に形容詞に転化して今日の電気・電子関係の用語を生んでいるというわけである。

経済学辞典類等によってこのことは明白な事実なのだが、それでもなお研究者のなかには、エレクトロン貨幣はリディアで使用されて以降では、既述マーシャルにしたがうかのように実在しないと一方的に宣言するものもいる。果してそ

うなのだろうか。実は驚くなかれある国では長期にわたってそれが製造され流通していたのである。何時・何処での話かて？。なんとそれはわが江戸時代においてその慶長6=1601年から明治2=1869年までの長期間にわたって製造され流通した金貨のすべては例外なくエレクトロン貨幣だったのである。

事のついでにというのもなんだが、さらにしばし協道に入ることを許されたい。その昔といっても10年ほど以前に世界史辞典をつくる作業にその原稿執筆ということで参加したことがある。具体的にのべれば『角川世界史辞典』（2001年・角川書店刊）これである。その時に依頼をうけた項目の一つに「金銀複本位制」というのがあった。このための原稿を執筆中に日頃から頭にある私見を、筆者のための窓口になっている事務方の人物にブツツケて賛同を得たのである。その持論的見解とは依頼原稿のテーマたる複本位制の複という文字についてである。

中学生水準の教育をうけた人ならば万人が万人ともご承知のように複は2以上の数量を意味する文字である。腕白小僧の旧制中学生（5年制）になりたての1年生時の四月に初めて英語を習い出した。その時、先生は念をいれていった「第1人称の単数はI（アイ）である。複数ではWe（ウイ）であって2人以上を意味する。そのことはそれが百万人であってもWeで示すのである。つまりWeの意味する実数はWe Japanes というように日本人全体をふくむこともできるわけのものであって、定義としていえばそれは2以上無限大ということになる」と。心中にはこのことが銘記されているのである。

かくて連絡係をしてきている事務方に以下のことを告げた。複本位制の複の文字には上述のような意味があるのだが、実はわが江戸時代には長期間にわたって世界的にも珍しい金貨・銀貨・銅貨の三つの貨幣が本位貨幣として流通する三貨制度とよばれる事実がある。この三貨制度のことを金銀銅複本位制と表現するために特にこの複本位制というタームを温存・確保しておきたい。したがって原稿の項目「金銀複本位制」を実体内容にはいささかの変わりもない「金銀両本位制」にしてはどうだろうかと話しかけたのだった。原稿入手の担当

者は「そうですね」と納得したので、編集委員という偉い先生方に肩をならべているひとりに大学＝如水会々員の後輩にあたる阿部謹也氏もおられるという気安さもあって、編集委員の先生方にこの旨を伝えて「金銀複本位制」を「金銀両本位制」に変更するように依頼したことだった。

早い話が鉄道線路が1つの場合は単線・下り専用・上り専用の2本の場合、これを複線という。東海道本線のように更にもう2本の線路のある場合に、そのことを特に強調するために複々線と称するのだが、本来的には字義からいって複線でこと足りるのである。お気付の方もおられることと思うのだが、筆者は本稿の既述部分において二つの貨幣の場合は必ず両本位制とのタームを使用した。では筆者の提案を連絡事務員から聞いた偉い先生方の応答はどうだったのか？。「無名に等しい田舎大学＝地方大学のへぼ教授が何をホザイているのか」とばかりに門前払いをくらわしたのである。しかしその勢に乗って「もう原稿も書かなくてイイヨ」とは流石にのたまわなかった。

それにつけても漢字に見出される古代中国人の偉大さに最近気付くことになり、つくづくと敬服しているのだが、漢字には二以上無限大の数をカバーする複と二専用の両という似て非なる文字がある。この偉大さには孔子や孟子を、いかな例えば一時期百家相鳴（ヒャッカソウメイ）という言葉がはやったことがあるが、古代中国での例えば道家（ドウカ）とよばれる老子や莊子、墨家（ボッカ）とよばれる墨子、法家とよばれる韓非・李悝（りかい）、名家の恵施・公孫竜等を百にも達しようという沢山の思想家・哲学者が輩出され、これを諸子百家（ショシヒャッカ）といった。彼等が競いあうのを百家相鳴と表現したわけである。

これをバックにして考えれば複の先端でのみダブル複と両との二文字を考え出したのもむべなるかなである。「処変れば品変る」という名言がある。他の地においても中国語の両・複同様の言葉が多くあると思うのだが、素人の悲しさで辛うじて知りえたものは、古代インドの言語であるサンスクリット語に——またまた原語そのものを知りえぬことはかえすがえすも残念である——単数・双

数・複数に三分される文字があつて漢字の単・両・複に対応するのである。中国とインドの両国が世界四大文明発祥の地とよばれる二国であるのも当然のことであろう。

ここで話柄を本来の道にすゝめる地点に來たわけである。が、これを十分に説明するためにも節を改めることにしたい。

III 金銀比価問題からの解放

当時の金銀比価問題になやまされていた一流先進近代国だったヨーロッパ諸国と同時代にあつて、全く例外的に金銀比価問題になやまされることのなかった江戸時代日本の貨幣制度の仕組みはどのように形成されていたのであろうか。以下その解明にすすみたい。

まず間接的な理由から。江戸時代にはすでに貴金属の金と銀とは対応させるのではなく、混合＝合金することによって仲よくさせてやろうではないかというか、それらを統一するという思想があつたと考えられる。その証拠ないしは実行が既述のエレクトロン貨幣の存在である。この間接的な理由に対して直接的な理由なのであるが、思いきって初歩にもどつてこれを考えることにしたい。

江戸時代の貨幣制度が金・銀・銅の各貨幣からなる三貨制度であるが、金貨と銅貨とはそのもの自体を支払い等のために必要とされる量の受け渡しによつて、直ちに取引関係が決済・終了となる計数貨幣＝貨幣数量をかぞえることが中心的作業という特徴をもつ貨幣であつたのに対して、銀貨は受け渡しに際してその必要とされる量を当事者すなわち受取人と支払人とが計量器＝天秤（テンビン）（＝が代表格）で確認して後に初めて受理されるという秤量貨幣——その重量を測定することを中心作業にするという特徴をもつ貨幣だった。芝居や映画やテレビでの時代劇の大坂商人宅の帳場の例外なく計量器を備えている光景を想起されたい。というのもその銀貨＝丁銀は海鼠（ナマコ）型の銀塊だったからである。

ここで蛇足的注釈を若干。秤量貨幣の秤量は広く一般にヒョウリョウとよま

れている。しかし正しくはショウリョウである。言葉は生きてるとよくいわれている。われわれ日本（ニッポン）人が日ごろ活用しているのだから当然のことであるのだが、ここに特に生きているというのは量質両面にわたって変化しつつあるという意味である。この意味において秤量が正しくはショウリョウではあっても圧倒的多数が正しくないヒョウリョウをよんでいると終局的にはこれが正しい発音になってしまうのである。同一コースを歩んでいるものに早急がある。筆者の記憶では正しくはサッキュウであった。しかし現在ではマスコミと政治家等もソウキュウとよんでいる。

これに類似する異質の例もついでにあげておく。豹変（ヒョウヘン）これである。機をみて有利な方へ態度・考え方を一変するとの意味をもつ言葉として使用されている。だがこれは古代中国の『易経』（エキキョウ）に「君子は豹変す。小人は面を革（アラタ）む」の一句にあるもので、小人は顔面をかえるだけで済ませても君子たるものは豹の毛が抜けかわると斑紋（ハンモン）も鮮やかになるように自己の誤りを顔面の操作だけではなくて全面的にはっきりと正すとの意であって、現行普及の有利な方への行動変化との意では決してないのである。

ついでにもうひとつ。日本人が毎日口にしてしている日本語のことを一般的には国語とよんでいる。一般化していえばそれぞれの国々で共通語または公用語として使っている言葉ということになろうか。だがその国語なる熟語の歴史をのべるとこの筆者でさえ、明治初期、それも15年ころまでの段階では国語とは中国は春秋時代の八ヶ国の歴史をつづる国語という名の漢籍と理解していたことを知らなかった。したがってこの点からいっても小学生には国語ではなくて日本語と教育することが肝要と思えてならないのである。特に文部省当局に云いたい。

理論展開の本筋にもどる。上述のように丁銀とよばれる海鼠状の銀塊の受授においては、その品位はこれを製造する公営同然の銀座を信頼して、これを問わないというのが秤量現場での原則であった。逆に金貨に対してはそのようなこ

とはなく、必要に応じて現場でも金貨を歯で噛んで確認した。金はやわらかなので二セ金貨とその点において差があったからである。

上述のように計数貨幣と秤量貨幣とは全く異質なものである、金貨の世界と銀貨の世界とは殆んど緊密なつながりがなかったわけである。このことからして江戸幕府をして金銀比価の煩わしい問題から解放されていたということができるのである。

慶長 14=1609 年に金 1 両=銀 50 匁という幕府による公定比価が制定された。次いで改鑄、正確には改悪鑄のあった元禄 13=1700 年には金 1 両=銀 60 と改正された事実がある。この公定比価の存在そのもの及びその改定という事実そのものとが、当然に金銀比価の問題にわずらわされることがなかったとの既述の主張と抵触するのではなかろうかとのうたがいが生じうる。しかしこの公定金銀比価は当局にとっては一応の目安であって、これを経済界に厳密に実行させるといった意志はなかった。現実には取引する庶民に金銀の交換割合の決定はこれをまかせていたのである。このように日常取引きでの市場における金銀比価を認めていたので、幕府は金銀比価の問題になやむことがなかったわけである。もとより他方において幕府当局自身はこの公定比価の保てるように不足している方の貨幣の増鑄によってその比価保持への努力をしたのである。

IV 新型銀貨登場と金貨の役割

ヨーロッパ先進諸国のように金銀の公定比価と市場比価との乖離によって苦しませられることもなく、極めて順調に出発していた江戸時代も、やがて平和の中に安逸をむさぼり、後述のように金貨の品位の切り下げによって財政問題の解決をはかるも、後述のようにそれに必然的に伴うインフレーションという問題になやまされることになる。そのうちにも時が流れ年代も下って明和 9 年=1772 年 9 月にいたって、これまでの海鼠状の銀塊としての銀貨=丁銀から庶民にとっては突然に新型の銀貨——金貨同様の計数貨幣としての銀貨が発行されることになった。

これまた蛇足の注釈になるのだが、上記の明和9年には江戸三大火事のひとつとされる目黒の行人坂（ギョウニンサカ）火事や大旱魃および洪水までも発生した。このことを反映させて語呂合わせよろしく明和九＝メイワク＝迷惑＝非常に悪い年ということで、明和9年もその11月に改元されて年号は安永と決定された。しかし経済の実体は同じことだったので庶民の健全な批判的感覚は

年号は 安く永くと 変われども

諸式高直（ショシキコウジキ） 同じ迷惑

年号は変わってもすべてのものの価格＝物価は高く改元以前の明和九＝迷惑つづきだよとの狂歌によって世相を評したのである。

この新型銀貨の発行は改元直前の9月だったので当然ながらその年号を採用して「明和南鐐二朱判」という。南鐐（ナンリョウ）とは銀の別称であって、早とちりの古銭業者の一部から拡散した明和南鐐二朱銀との名称に不正が明白になろう。これでは云うまでもなく明和銀二朱銀と銀がダブルことになるからである。正式の名称の二朱判とは銀ではあるが金貨の二朱判と全く同じものとして取扱えよということである。ただしこの南鐐との言葉は銀は銀であっても舶来の上質の銀であるということを言外に匂わせているのである。これによって銀量の軽少さを合理化するのである。因に先走ることになるのだが、この新型銀貨の完成貨幣は天保8＝1837年発行の天保一分銀である。これは大きさの点では明和南鐐二朱判よりもやや小さいにもかかわらず、通用価値が二朱十二朱＝一分と二倍なのである。この矛盾を解消するためになされた当局の説明は、この銀は南鐐よりは上質の花降（ハナフリ）銀を使用したという。そして、花降一分銀との名称さえ机上案としてあったといわれている。

さてこの新型銀貨の明和南鐐二朱判の出現によって日本にも改めて金貨比価の問題が発生する条件が出来上ったのである。丁度イギリスにおいて1ポンド金貨と1ポンド銀貨との併存流通で両者の間に壮絶な争いが展開されたように。ところが事実とはいえば日本では依然として金銀比価の問題とは無縁だった。その論理とはこうである。さきに江戸時代社会に実現した平和の安逸にふけっ

た結果としての財政赤字を埋めるべく実行されたのが金貨の鑄直しによってその差額——これを出目（デメ）とよぶ——を入手しようとしたからである。表現をかえていえば4匁の純金をふくんでいる慶長小判を元禄の大改悪鑄で出目を入手しようとしたわけだが、わかりやすくするためにいま元禄小判の純金量を3匁とすると、両者の差額は1匁となる。かくて慶長小判3枚・金12匁＝元禄小判4枚・金12匁——差引き小判1枚が創出され出目を入手するという寸法である。この出目をえた悪質の貨幣が市場に流通する結果として、インフレーション（物価上昇）が起らない限りは出目イコール購買力増となり当局の懐はゆたかになる。

しかしながら現実には次のようなプロセスでインフレーションは必然化する。改悪鑄による出目をもたらしただけの金量の軽い貨幣が流通する初回＝1回目こそ、相当期間にわたってうまくゆくのだが、反面、これによって痛い目にあった商人を中心とする経済界は自衛行動に出、情報入手や新しく発行の貨幣分析——当局はこれを厳禁したが——の強化によって、高品価格を引き上げて損失をさける行動に出るわけである。かくて悪貨の流通は緩急の差はあれ「諸式高値」＝物価上昇という悪循環に陥り、幕府は結果として骨折り損のくたびれ儲けということになる。とはいえこれに懲りない幕府の同一年行動のくりかえしから貨幣の純度はドンドンと悪化のコースをたどることになる。

あたかも無限地獄におちたかのような幕府にとって、この悪循環からの脱却こそが最大最優先の課題となる。この物価上昇によって折角に入手した出目が相殺（ソウサイ）されないような収益の入手方法はないのだろうかとの努力がとうとう陽の目をみる時がくるのである。田沼意次（タヌマオキツグ）時代に官僚の一人の智恵者の手によって解決の道がひらかれた。具体的にいえば計数貨幣としての銀貨発行に思いいたったのである。その当時においては金が価値尺度・価格表準として機能していたから、金貨の内容＝質さえ不変ならば、この新発行の計数銀貨は少々悪いものであっても通貨として十分に仿ぎうるわけである。そして更にはそれによって物価上昇の起ることはあるまい。このよう

な思考にもとづいて新型の計数銀貨を発行したのである。この智者自身はもとより自覚こそしていなかったのだが、読者は上記のことをヨリよく理解していただくために換言すればこの計数銀貨の発行は補助貨幣の発行・登場ということに他ならないのである。

もとより当時の社会にあつて貨幣に本位・補助の区別意識があるとは到底考えられない。貴金属＝通貨との固定観念があつたからヨリ少量の銀でヨリ大きな購買力をもつ貨幣を作りたいということで、既述のように中国から輸入した特別上質の銀を使用しているのだから軽少であつても当然だとばかりに南鐐とあえて称したわけで、この総仕上げ貨幣たる天保一分銀の場合にも、南鐐よりも遥かに上質の花隆銀を使用したとして勿体をつきつけたのである。これらの狙いは銀量のヨリ少いにもかかわらず額面值のヨリ高い貨幣の製造・発行にあつた。

このような暗中模索の努力が期せずして客観的事実として本位貨幣と補助貨幣とを登場させることになったわけである。同時に金銀比価問題との関係なしということでもあつた。

ここに述べたことが実は同時に重要な事実を出現させていたことに気付かなければならない。ということは明和 9＝1772 年のわが国が実質的な金本位制を確立させたということこれである。

日本における金本位制の出現・樹立は何時かと質問するとすれば、一般的にはおそらく 99 パーセントの返答は明治 30＝1897 年であろう。少数派の貨幣史の心得のある人なら明治 4 年を口にしてくれるだろう。しかしまさか明治ならぬ明和 9 年とは、お釈迦さまでもご存知あるめえーということになるのではなからうか。

日本を離れて世界的公認学説といえ、世界で名実ともに最初の金本位制を確立したのは 1816 年のイギリスであるということになっている。が実質的にはかの有名なアイザック・ニュートンの金に有利な金銀比価を 1717 年に制定されて以来、悪貨である金貨のみがグレシャム法則によって流通するようになり、銀

貨は流通過程から引き揚げられるが削り盗られたりした。したがってイギリスの金本位制になったのは1717年であるという。

上記の流通していた削り盗られた銀貨に対しては、造幣局は法定純分を有する正しい銀貨を製造したにもかかわらず、民間が勝手に削り盗ったものであって本局は関知しないとの立場をとったので、銀貨は本位貨幣の資格を失なっていた。すなわち銀貨は今日の補助貨幣のように25ポンドまでに使用＝流通制限され、それ以上の使用については銀塊としてのみ評価するとされ、更には一歩前進して銀を造幣局に持込めば本位貨幣の銀貨と交換してくれる銀貨の自由製造制度の停止などと徐々に補助貨幣化されていった。そして金銀比価の問題から解放されるとともに銀貨が完全に補助貨幣になったのが1816年というわけである。

江戸時代のわが国では幕府主導のもと、積極的・直截的にして単純に補助貨幣としての銀貨を創造したのであって、イギリスのようにほぼ100年かけてのなしくずし的にはなくて一挙に補助貨幣を登場させての金本位制の樹立である。それも明和9＝1772年なのである。かくてイギリスに対比してわが国がその点での先達（センダツ）といわなくてはならない。しかしこのような世界的にも誇りうる事実も現在では完全に忘却の淵にのみこまれてしまっている。「金本位？それは何のこと？。関係ないヨ」との答が現在の若者から返ってくるのが普通であって全く関心がないようである。貨幣論・貨幣史にいささかの情熱とエネルギーとを注入したものとしてただただ寂寥（セキリョウ）の感を禁じえない。

P.S. 本稿はこれで終了なのだが、よく考えてみると同様のものやその先達があった。例えば同じ江戸時代に大坂は堂島（ドウジマ）における全国大名の換金目的の用年貢米取引に伴う、その上部構造としての帳合商（チョウアイアキナイ）＝定期の先物（サキモノ）取引も世界に先駆けて実現した。更には本誌327号の拙稿「室町時代の貨幣経済」で言及したように、近代銀行の祖は17世紀のイギ

リスの Goldsmith であるとの世界公認の学説に対し、実は 15 世紀の室町時代の合銭（ゴウセン）を媒介とする土倉（ドソウ）だった、等々。要するに日本は世界的視野での金融先進国だったわけで、江戸時代における金本位の出現も当然のことかもしれない。